

## 労働概念の再検討（２）

—監督労働・構想労働・流通労働—

清水 真志\*

### 【目次】

はじめに

#### 1 労働と演技

1-1 流通労働と労働概念

1-2 監督労働における演技的次元

1-3 資本家と貨幣の「身体」

#### 2 労働理論の急所：構想労働と流通労働

2-1 構想労働における分業

2-2 構想労働における技能と熟練

2-3 労働としての資本家的活動

【以上，第53巻第2号】

#### 3 商品論における労働

3-1 流通労働としての価値表現

3-2 価値形態論の演技論的文脈

3-3 貨幣形態と完全演技

結語

【以上，本号】

### <要約>

人間労働は、商品や貨幣との同型性をもっている。この同型性を探究するためには、価値形態論を労働過程論の観点から再考する必要があるが生じる。心像の内部に宿された構想と商品の内部に宿された価値とは、どちらも外から覗き見ることができない。それゆえ、構想や価値を実現させるためには、まずそれらを表現しなければならない。表現は、他人にどう読まれるかを予測した上で、他人にどう読ませるかを決定することに基づくが、これは構想力の演技的使用と同じ意味をもつ。価値形態論は、商品世界の深部に働く演技的労働

---

\*専修大学経済学部教授

の力学を詳らかにしたのものとして捉え直すことができる。

JEL区分：B14, B51, J50, J53, P12, P16

キーワード：Labor Process, Acting Character of Labor, Distribution Labor, Director Labor, Initiative Labor, Emotional Labor, Value Form Theory, Marx, Uno Theory

### 3 商品論における労働

#### 3-1 流通労働としての価値表現

すでに述べたように、マルクスの労働理論は、主として生産労働を分析するためのツールとして組み立てられてきた。流通労働が真正面から論じられることは少なかったし、稀に論じられる場合でも、生産労働の分析から得られた結果をそのまま流通労働にも適用する方法が取られてきた——流通労働とは有用効果や情報といった無体物を作る生産労働である、云々——とあってよい。

しかし、ここまでの本稿の議論を踏まえてみると、こうした生産労働規定の直接適用は、流通労働を生産労働に見立てるだけの安直な方法といわざるをえなくなる。見立ても分析の一手法ではあるが、分析そのものではない。マルクスの労働理論を刷新するためには、むしろ従来とは逆に、流通労働の分析から得られた結果を生産労働に適用することを試みなければならない。

とすれば、流通労働を分析する上で、労働理論という枠組みの内部に閉じこめることはもはや得策とはいえなくなろう。その枠組みの外部、市場理論や資本理論の方にも目を移すことが必要になるのではないか。かかる問題意識をもって眺め直してみると、マルクスの市場理論の第1章に当たる商品論、就中、価値形態論には、流通労働を分析する上でのヒントが隠されているように思われてくる。このヒントを得るため

に、これまでもっぱら価値形態論のなかだけで論じられてきた商品の価値表現を、本源的な流通労働として捉え直し、正式に労働理論の俎上に載せてみることにしよう。

価値表現の主語になるのは、マルクスの場合は商品であるが、宇野の場合は商品所有者であり、商品は目的語（表現するものではなくされるもの）でしかない。売りと買いとが未分離である貨幣形態以前の段階では、自商品の価値を他商品の身体を借りて表現することは、自商品の販売を含んでいると同時に、他商品の購買も含んでいる。さらに深読みすれば、自商品についての品質保証を含んでいると同時に、他商品についての有用性評価も含んでいる。これらは何れも、「売買それ自体」（森下 [1976] 91頁）に属する労働と呼んで差し支えない営みであろう。つまり、背後の生産関係を捨象された商品論の次元でも、いわば「売買それ自体」の原型というべきものは残留するのであり、そのこと自体が、労働の世界における流通労働の位置が決して周縁的なものではないことを物語るのである。

もともと宇野の場合、商品論からは商品の価値実体が全面的に捨象されるために、いかなる意味においても労働には言及できなくなるかのような印象が生まれる。また確かに、労働理論に先行する商品論の次元では、「売買それ自体」が果たして労働と呼べるかどうかにも、最終的な判断がつかかぬ点が残る。

しかしこの次元でも、「他人のための使用価値」を抱えた商品所有者が、どうしても自商品

の価値実現という目的のために奔走しなければならない状況に置かれていることは、十二分に明確になるはずである。そして価値実現という目的のためには、寝食に関わる日常生活動作や遊戯などの営みとは違って、他の手段をもって代えがたい価値表現という営みが必要になることも、十二分に明確になるはずである。価値表現のやり方は、道具の使い方などと同様に決まっておき（機制化されており）、どの商品所有者も同じやり方に従う必要があるが<sup>48)</sup>、表現の材料となる等価物の選択には無限の自由度がある。労働の本質が、特定の目的を追求できる合目的性格と、多様な材料を用いて多様な目的を設定できる可塑性とにあることを理解した頭で読めば<sup>49)</sup>、価値表現という営みを労働とは呼ばないことに決めてしまうのにも、強い抵抗が生まれよう。

しかも宇野の理解によれば、価値表現は、他商品の使用価値にたいする緊急の欲望を叶えるための手段でもある。自分が欲しいものを特定するためには、自分が作るものを思い描くために用いるのと同種の構想力を用いるが必要になる。しかも、たとえば上衣が欲しいことが特定されただけでは、出来合いの上衣を手に入れるべきか、それとも布地を手に入れて自分で上衣を縫うべきかはまだ特定されていない。出来合いの上衣を価値表現の材料に用いることは、当事者の頭のなかでも、布地を材料に用いて自分で上衣を縫うという労働と比較可能な内容をもつのである。

もとよりマルクスの用語では、ある商品と引き換えに別の商品を手に入れることは、「商品の変態（姿態変換）」と呼ばれる。交換や売買をつうじて商品が「形を変える」ことと、労働をつうじて人間が素材に「形を付ける」こととの間には、結果の次元で考えると何の違いもない<sup>50)</sup>。アダム・スミスは労働を「本源的購買貨幣 original purchase-money」と呼んでいたが（Smith [1776] I, pp. 32-33, [1]64頁）、この呼称にはそれなりの現実的根拠があることを認め

なければならない。

このように価値表現を流通労働として論じることが可能である根本的な原因は、おそらく商品の価値自体が、労働の構想との論理的同型性を有していることにある。

すでに述べたように労働の構想は、最初にたとえば建築家の心像から取り出され、平面的な設計図のかたちで表現された後、次に図面から取り出されて、立体的な建物のかたちで実現する。この手順は、商品の価値が実現するまでに踏むそれと全く変わらない。心像の内部に宿された構想と、商品の内部に宿された価値とは、どちらも外から覗き見ることができないという性格を共有している。それゆえ構想を実現させるためには、それをまず設計図の上に表現する必要があるように、価値を実現させるためにも、それをまず「綿布10メートル＝1着の上衣」という等式の上に表現する必要がある。労働の構想と商品の価値とは、どちらもドイツ観念哲学で説かれる「本質」や「精神」のように、表現のステップを踏まずにいきなり実現（「現象化」）するわけではないのである。

このように表現と実現とが別個のステップをなすために、自分で表現した構想でも、その実現は他人の手に委ねることが原理的に可能になる。この分離可能性は価値の場合はさらに顕著であって、自分で表現した価値の実現は、どうしても他人の手に委ねざるをえない。もっとも、価値の実現が商品にとって「命がけの飛躍」になるのと反対に、構想の実現はきわめて確実性が高いから、いかなる「飛躍」も必要ではないというのが常識的な見方かもしれない。流通が不確定であるのと反対に、生産は技術的な確実性をもつという定説を支えているのも、この見方であろう。しかしこれは、表現と実現という二つのステップとの中間に、もう一つ別のステップ、読解・解釈というステップが介在することを看過した見方ではないか。

たとえば、接客マニュアルは一種類しかなくとも、そのマニュアルを実行した接客労働が顧

客に与える印象には、はっきりとした個人差が現れるのが常であろう。ただこの個人差は、たんに実行のレベルでの熟練度の違いだけから来るわけではない。むしろ、マニュアルの文面からどこまでの意味を汲み取るかの個人差、いわば構想の解釈のレベルでの熟練度の違いが大きく影響する。

マニュアルの意味を考えずに、ただその文面に書かれている動作を行うだけでは、機械的な営業スマイル、感情労働論でいうところの「表層演技 surface acting」(Hochschild [1983] p. 35) に陥る。台本には台詞しか書かれていないため、その台詞の背後にある感情を役者自身が読み込まないと、ただ台詞を棒読みするだけの拙い演技になるのである。これはちょうど、楽譜は一種類しかなくても、そこからいかなる楽想を読み取るかは演奏家の能力に委ねられ、演奏家の数だけ異なる音楽が奏でられることになるのと同一の事情である。

建物の設計図ですら、かかる読解・解釈のステップを免除されるわけではない。設計図は、何種類もの図面（意匠図・構造図・設備図）と仕様書（特記仕様書・標準仕様書）とからなり、平面表示記号や建築設備記号などの製図記号が無数に散りばめられた晦渋なドキュメントなのであり、これをすらすらと読解できる素人はまずいない。衣服の型紙も同様であって、独特のパターン記号の読み方に熟知していないとまるで使い方が分からない。つまり、構想の内容が複雑であるほど、その表現には日常的な自然言語からかけ離れた特殊記号を用いることが必要になり、その実現にも高度な読解力が求められるのである。

かかる能力が、「平均的にだれでも普通の人間が、特別の発達なしに、自分の肉体のうちにもっている単純な労働力」(K., I, S.59, [1]87頁) に漏れなく付属するとは考えられない。設計図を他人の手に預けた建築家にとって、自分の構想通りの建物が完成するかどうかは、「命がけの飛躍」といってもそう大袈裟にはならな

い程度の不確定性をもつのである。

ここでも、商品の価値と労働の構想性との間には、意味論的な同型性を認めることができる。「商品の価値対象性には一分子も自然素材は入っていない」(K., I, S.62, [1]93頁) というマルクスのいい方を借りれば、建築家の心像の内部に宿された状態の構想にも、目で見たり手で触れたりすることができるような「自然素材」は一分子も入っていない。これにたいして、構想を表現した設計図は、一枚の紙製の図面という素材的な物質性をもっている。とはいえ、上級労働者や流通労働者が本物の資本家ではなく、その模造にすぎなかったように、設計図も本物の建物の模造にすぎない。模型と実物との間には、一方はプラスチック製なのに他方は金属製であるとか、一方は硬いのに他方は柔らかいとか、一方は動かないのに他方は動くとかいった具合に、多面にわたる違いがある。模造を模造たらしめているのは、決して外見的な類似や素材的な一致などではない。たとえば、大仏は大きいからこそ大仏なのだと思込んでいる子供の目には、手のひらサイズの大仏のフィギュアは、少しも大仏には似ていない別の実物と映るであろう。模造には「自然素材」が入ってしまう分、実物とは無関係に独り立ちしてしまうおそれもある。

したがって、模造によって実物の構想を伝えるためには、まず模造をプラスチック製の小さな物体という個物としてではなく、金属製の巨大な物体の模造として見てもらう必要がある。それはちょうど、書かれた文字をたんなるインクの染みとしてではなく、意味をもった記号として見ることと同じである。

しかし記号は、本質的に多義性をもつ。この多義性は、汎用性といいかえてもよい。異なる状況の下で、異なる事物を指し示しうるからこそ、記号として成立するのである。たとえば、自分が見た犬のイメージを他人に伝えるためには、「犬」という言葉を使う以外に方法はない。しかしこの言葉は、多種多様な犬を指し示すの

に等しく用いることができるから、ただ「犬を見た」といっただけでは到底足りない。そこで、毛が長かったとか、足が短かったとか、あれこれと説明を追加するわけであるが、それらの説明自体も汎用性のある言葉によって組み立てられているから、どんなに言葉を補っても自分が見たままの犬のイメージを正確に伝えることは不可能であろう。

設計図も模造である以上は、かかる意味論的な機制から離脱することはできない。建築家のビジョンは取り替えの効かない一回性の経験であるが、そのビジョンを表すためだけに特注される専用の記号はない。設計図がどれほど細密に書かれていようと、設計図で指し示すことができるのは建築家が構想したままの「この建物」ではなく、あくまで「このような建物」にすぎないのである。

その意味において、表現とは抽象化であり、没個性化であり、凡庸化であることを避けられない。このことは表現一般の原則であるから、構想の表現だけでなく、価値の表現にも当てはまる。そして価値表現の場合、「のようなもの」という観念性は、等価物の使用価値に端的に現れる。

自商品の価値表現は、他商品への交換要請という側面をもつ。すでに述べたように、自分が欲しいものを特定するためには、自分が作るものを思い描くために用いるのと同種の構想力を用いることが必要になる。したがって、あらかじめ労働の結果のビジョンを明確に思い描けるような構想力が人間に具わっているのだとすれば、綿布所有者もこの構想力を用いて、欲しい上衣のビジョンを明確に思い描いているものと考えてよいであろう。

純粹に綿布所有者の欲望を満たすためだけの交換要請という次元で考えると、等価物は綿布所有者の思い描くビジョンと合致する上衣だけに限定されるのであり、どんな上衣でもよいわけではない。ビジョンが明確であればあるほど、等価物には強い限定が掛かる。極端に考えれば、

特定の上衣所有者のラックに吊ってある「この上衣」以外は欲しくないという話になるかもしれない。

しかし、自商品綿布の価値を広くアピールするための価値表現という次元で考えると、こうした限定は理に適わないであろう<sup>51)</sup>。マルクスが述べているように、「 $A=B$ 」という価値表現は、「 $A$ は $B$ と似ている」という内容をもつ。綿布と上衣とは外見上全く似ていないが、目に見えない綿布の価値は上衣とそっくりに見える、というアピールである。しかし「この上衣」の横には、外見上それとよく似た上衣が何着も並んでいる。かかる状況の下で、綿布の価値は「この上衣」以外とはそっくりでないと言表することは、綿布所有者の交換要請の実現性を絶望的に低めることになるが、それだけでない。「この上衣」の所有者以外を訴求対象から締め出すことで、綿布の価値表現のアピール力をも大幅に削ぐことになるのである。

もとより「 $A=B$ 」は、「 $A \neq \text{非} B$ 」と同義である。「非 $B$ 」の範囲が広まるほど、「 $A$ 」の値も狭い範囲に閉じ込められる。しかし商品価値は、たとえば世に二つとない美術品などの絶対価値とは本質的に異なり、この綿布はあの綿布と等価であるという同種性と、この綿布は上衣以外のさまざまな他商品とも等価であるという一般性とを具有する。それゆえ、純粹に綿布の価値表現という次元で考えると、理想的なのは上衣以外のさまざまな他商品を等価形態に置いた「拡大された価値形態」のフォーメーションであろう。たとえ「この上衣」以外は欲しくないというのが本音でも、綿布所有者は、綿布の価値表現に「この上衣」以外の材料を用いたくないといい張るわけにはいかない。そういい張ったとき、綿布はもはや商品よりも美術品に近い何かになってしまうのである。

それゆえ綿布所有者は、「この上衣」でなくても「このような上衣」であればよいという具合に、どこかで自分のビジョンとの折り合いをつけざるをえない。しかもこのビジョンは、上

衣所有者の目には見えない。したがって、「このような上衣」がどのような上衣であるかを上衣所有者に示すには、口頭で説明したり、図解したり、店頭にある上衣を指差して、これと似た感じの上衣が欲しいと述べたりする必要がある。たとえ指差したのが現物の上衣であっても、それは建築家の設計図が「このような建物」を指し示すための模造でしかないのと同様、所詮は「このような上衣」を指し示すための見本の域を出ないのである<sup>52)</sup>。

かかる等価物の見本性は、貨幣形態まで来ると歴然となる。個々の貨幣片は、もはや「この貨幣」という個性をもちえない。自分の掌にある100円玉は、この世にある全ての100円玉と全く見分けのつかない、いわばクローンのなかの一個として存在する。究極的な意味での凡庸な存在である。

しかし、凡庸化のプロセス自体は、貨幣形態に先行する「簡単な価値形態」の次元でもすでに始まっていると考えなければならない。このプロセスをどうしても受けつけられない綿布所有者は、すでに述べたように出来合いの上衣を入手することには見切りをつけて、自分で布地から「この上衣」を縫うしかない<sup>53)</sup>。それでも、建築家が自分で建てた建物が「この建物」のビジョンを正確に反映するとは限らないように、自分で縫えば確実であるという保証もないのである。

もっとも自商品綿布も、他人の目には、商品世界に数多ある「このような綿布」のなかの一つとして映る。そして綿布所有者自身も、他人の目には、商品世界に数多いる「このような綿布」の所有者のなかの一人として映る。自分の綿布だけはそこらにある綿布とは違うとか、自分だけはそこらにいる綿布所有者とは違うとかいい張っても、自分が欲しいのは「この上衣」だけだとい張るのと同じことで意味がない。第一それでは、彼の綿布は商品ではなく美術品に見えてしまい、彼自身も商品所有者ではなく芸術家に見えてしまう。

したがって綿布所有者は、他人の目に映る自分の凡庸なイメージを意識しながら、そのイメージから逸脱した振る舞いを見せないように自分自身をコントロールする必要がある。これはちょうど、労働のもつ演技的側面の分かりやすい事例になろう。

商品世界の外部ではペテロとかパウロとかいった固有名をもっていても、商品世界の内部ではいわば無名の役者Xとして、「このような綿布」の所有者の役柄を演じなければならない。「この上衣」だけが欲しいという自分の欲望に忠実に振る舞うことは、演技の妨げにしかならない。自分だけが綿布の価値を他の綿布所有者たちより高く見積もることも、凡庸たるべき綿布所有者の演技としては悪目立ちしすぎる。さらに、自分だけが他の綿布所有者たちより価値実現を急いでいるらしき気配を察知されることもNGになる。本当は今すぐ上衣が欲しいとしても、それほど急ぎの用ではないかのように装わなければならない。商品所有者の演技は、たとえ個人単位で行われても、本質的には周囲への目配りが肝心な集団演技なのである<sup>54)</sup>。

### 3-2 価値形態論の演技論的文脈

以上の議論を踏まえると、これまで再三にわたって議論されてきた価値形態の展開の動力についても、新たな角度からの考察を加えることができよう。

かつてこの動力は、たとえば上衣以外にも欲しい商品があるから「簡単な価値形態」だけでは足りなくなり、「拡大された価値形態」が展開されるというように、主として商品所有者の欲望の自己膨張力のなかに求められていた。これにたいして、比較的近年になるにしたがい、「拡大された価値形態」はたんに自分が欲しい商品を羅列したものではなく、交換手段となりうる商品、つまり他人が欲しがっている商品を先回りして入手しようとする迂回的な交換志向を示したものとして理解されるようになってきた<sup>55)</sup>。しかし、こうした志向を生み出す素地は、

「簡単な価値形態」のなかにも認められないわけではない。

たとえば、上衣所有者が欲しがっている茶を綿布所有者が入手できれば、上衣所有者は自分から動かなくても、自動的に茶が飲める結果になる。綿布所有者が茶を等価物に選ぶことは、上衣所有者の心像の内部にあった喫茶のビジョンの実現を、上衣所有者になり代わって綿布所有者が引き受けることを意味しているのである。それはちょうど、建築家の心像の内部にあった建物のビジョンの実現を、建築家になり代わって工業者が引き受けることに等しい。「上衣＝茶」という価値等式は、建物の設計図と同じように、構想の表現手段としての機能を果たすだけでなく、構想の伝達・転送手段としての機能を果たすわけである。

とすれば、生産現場における「構想と実行との分離」——正確には「構想の表現と実現との分離」といい直すべきであるが——の芽があらかじめ人間労働のなかに胚胎していたように、商品世界における「構想と実行との分離」の芽も、あらかじめ「簡単な価値形態」のなかに胚胎していたものと見て差し支えないであろう。他人の目を意識し、他人の反応を伺いながら綿布所有者として振る舞うことは、それがどんなに簡単な振る舞いにすぎなかったとしても、決まった配役に基づいた集団演技のレッスンであり、社会的分業の基礎をなすのである。価値形態論の根底には、演技論的な文脈が潜んでいるものと考えなければならない。

もっとも、そう思って価値形態論の周辺の箇所を眺め直してみると、この文脈は、価値形態論に先行する商品論冒頭の段階から早くも始まっていることに気づく。

たとえば商品は、その所有者にとっては無用の「他人のための使用価値」である。しかし価値表現は、それを行う本人が意識するとしないと問わず、必然的に商品の有用性のアピールを（ことによると品質保証をも）含んでいる。上衣を綿布の価値表現の等価形態に置くことは、

綿布を使うように上衣所有者を勧誘することに等しい。ところが皮肉なことに、他人に綿布を勧める綿布所有者本人は、何はさておき綿布だけは要らないという本音を抱えているわけである。

この本音が上衣所有者に筒抜けでは、綿布所有者の勧誘は説得力をもたない。それゆえ綿布所有者は、本音をひた隠しにして、あたかも自分自身にとっても綿布は有用であり、それを手放すのは惜しいけれども、あえて上衣所有者のために手放そうとしているかのように振る舞わなければならない。流通労働者にかんして先述した通り、顧客の良き相談相手としての演技である。「お買い得」を謳う広告宣伝は、裏を返せば、自分は「売り損」になるという偽りの告白に他ならないのである。

むしろ上衣所有者は、綿布所有者の本音と演技との間に齟齬があることは先刻承知している。しかしこの齟齬自体は、演技の効果を殺ぐ決定的な理由にはならない。綿布所有者の演技が「自然」なものであれば、上衣所有者の方でも、齟齬を見て見ない振りをするであろう。「他人のための使用価値」という商品の特殊なあり方自体が、商品を挟んで向き合った商品所有者たちの双方に、演技的な振る舞いを強いるわけである。

こうした観点からすると、商品の価値形態が「簡単な価値形態」の段階で止まっていられなくなるのは、商品所有者の演技がそれだけ巧妙さを増した証であるとも受け止められるのではないか。

すでに述べたように、価値実現を急いでいるらしき気配を他人に察知されることは、商品所有者にたいして不利に働く。本当は今すぐ上衣が欲しいと考えている綿布所有者も、どうしても今すぐ欲しいわけではないし、どうしても上衣が諦め切れないわけでもないかのように装わなければならない。とすれば、木を隠すなら森のなかという慣用句に倣って、本当に欲しい上衣をその他多くのダミーのなかに紛れ込ませよ

うとする行動が派生するのは自然な成り行きであろう。

「拡大された価値形態」は、下手をするとダミーが手に入ってしまうかもしれないリスクを伴うものの、少なくとも上衣所有者に向けた演技の手法としては理に適っている。駆け引きや騙し合いの横行する商品世界にあって、上衣が欲しいから上衣を等価形態に置くという「簡単な価値形態」は、商品所有者の演技として初歩的にすぎるとも考えられるのである。

商品所有者の演技は、彼らの交換動機がたんに自分の欲望対象を入手することから、他人の欲望対象、すなわち交換手段を入手することに切り替わるとさらに高度化する。

交換手段を求める行為は、昔から、相手の欲心を買うために相手の好みに自分を合わせる(媚を売る)ことに喩えられてきた。しかし改めて考えてみると、これは相当高度な演技力を要する行為であろう。ウケ狙いが見え透いた演技が観客を白けさせてしまうように、相手の好みに合わせているだけだということを相手に見破られては逆効果になる。相手の好みを自分自身の好みだと思込める域に達しなければ、演技は追真性をもちえない。感情労働論の語彙を使っていえば、上辺で営業用の笑顔を作るだけの「表層演技」ではなく、真心のこもった笑顔を作る「深層演技 deep acting」(Hochschild [1983] p. 35) が求められるのである。このことは、たんなる比喩以上の意味をもつものと考えなければならない。

たとえば先の設例に戻ると、上衣を欲している綿布所有者は、上衣所有者が欲している茶を入手し、それと引き換えに上衣を入手しようとする。この場合、もしも綿布所有者にとって茶がたんなる交換手段にすぎず、本当の目当ては上衣であることが上衣所有者に見破られたとしても、相手に媚を売る喩え話とは違って、綿布所有者にとって特段の支障はないように思われるかもしれない。

しかし、綿布所有者がどんな上衣でもよいわ

けではなかったように、上衣所有者もどんな茶でもよいわけではない。したがって綿布所有者は、たんに上衣を入手すればよいわけではなく、上衣所有者が欲している「このような茶」がどのような茶であるかを洞察しなければならない。そしてそのためには、別段自分で飲むわけではないからどんな茶でも構わないという当初の立ち位置を脱却しなければならない。

本来、綿布が自分にとって無用であったように、茶も自分にとって無用である。他商品を購入するためにのみ有用なものを「他人のための使用価値」と呼ぶのであれば、綿布所有者にとっては他商品茶も、自商品綿布と同様に「他人のための使用価値」なのである。

ただすでに述べたように、「他人のための使用価値」は、商品所有者に演技的な振る舞いを強いる。茶は一般的等価物と違って、上衣以外の他商品を購入するためには役立たないのであり、きわめて用途の限定された交換手段である。したがって、自分が欲しくもない茶を入手することは、もしも上衣所有者が茶との交換に応じてくれなければ一巻の終わりになるリスクを抱え込むことを意味する。茶が自分にとって「他人のための使用価値」にすぎないことを上衣所有者に見破られると、足下を見られて不利な交換条件を飲まされるおそれがある。相手の出方次第で壊れてしまうかもしれない際どい橋を渡るためには、たとえ上衣所有者に袖にされても慌てる必要はない、その場合は自分で茶を飲めばよいだけの話だというように、いわば「茶が欲しくないわけでもない自分」を演じなければならないのである。

ただ綿布所有者の演技には、こうした表層的な動機だけでは語れない側面が出てくる。茶に無知・無関心のまま行動したのでは、相手の好みをよく確かめもしないで贈り物をするのと同様、裏目に出るだけで終わる。それを回避するには、自分が欲しいものを思い描いたときのように構想力を用いて、喫茶のビジョンを具体的に思い描く必要が出てくる。上衣所有者になり



切って、本心から茶を欲している人間の役を演じる必要が出てくるのである。この演技は、まさに自分の心の領域にまで踏み込んだ「深層演技」と呼ぶことができる。笑顔を見せるのも仕事の内、茶を手に入れるのも仕事の内と割り切ってしまう「表層演技」では、その効果も高が知れよう。

このように考えると、手段にすぎなかったものが目的化（自己目的化）する物神性の契機は、従来のように、商品の価値形態が「貨幣形態」まで進んだときに説明されるのでは遅すぎるということが判然する。

自分の欲望と他人の欲望とが截然と区別されている間は、手段はあくまで手段の域を超えない。また、何でも買える貨幣を無際限に欲すること自体は、遠い将来にわたって必要な購買手段を確保するという目的に照らして理に適っており、必ずしも「呪われた黄金欲」(K., I, S.145, [1]232頁)に繋がるような不合理性をもたない。ただ、人間の欲望に取り憑く「呪われた」何ものかを物神性と呼ぶとすれば、物神性の契機をもつのは貨幣だけではない<sup>56)</sup>。その契機の萌芽は、自ら進んで他人の欲望に染まり、他人と人格を入れ替えようとする、商品所有者の「深層演技」の内部に潜んでいるのである<sup>57)</sup>。

### 3-3 貨幣形態と完全演技

もっともこのことは、貨幣の物神性が並外れて強いことを否定するものではない。貨幣をめぐる商品所有者の行動には、一時的な演技と違って済ますことのできないもの、もっと本気のもものが含まれてくる。

役者の本分は、すでに述べたように、自分の身体や外見を統制することをつうじて、直接統制することができない観客の感情や心理に働きかけることにある。演技が高度になるほど、当然ながら、役者に要求される統制能力も高度になろう。どれほど迫真の演技でも、それが演技であることを役者自身が忘れてしまえば、全てが統制不能の状態に陥ってしまう。役柄が役

者に憑依したかのような演技と、本物の忘我状態との間には、決定的な違いがあるものとしなければならない。

しかし「深層演技」を行う役者は、自分の身体や外見だけでなく、自分の感情や心理までを統制下に置く。たとえば苦情をつけてくる顧客を、きっとストレスを抱えた気の毒な人間に違いないと思いつくことで、心底からの謝意を発動させるのである。自分が嘘をついている間は、自分でもその嘘をすっかり真実と思いつくようにするという、詐欺の高等テクニックの応用である。

自分で自分の心を統制できない間は、乳児が大人に手足を操られてようやく正しい体勢を取れるように、他人に自分の心を統制されかねないおそれがある。そうした、ありうべき被害にたいする一種の自己防御本能が働いて、他人の好みを自分自身の好みだと思いつくことにも強い自制が働くであろう。この自制を解除できるのは、自分さえその気になればいつでも思いつくはずだという内心の確信があるからに他ならない。役者のメンタルコントロールの能力が高度であるほど、忘我状態まであと一歩というところまで深く役柄に没頭することが可能になるのである。

以上を踏まえると、マルクスが貨幣を求める心性を「呪われた黄金欲」と称した理由もよく分かる。

たとえば、自分の身体を動かすためには、まずそれを外部からの遠隔操作が利かない状態に置く必要がある。労働者にとっての労働手段と同様、自分の意志がなければ動かせない自分専用の道具として、一種の占有状態に置く必要があるのである。しかし貨幣を求める心性は、自分の意志とは関わりなく、貨幣がなくならない限りはいつでもどこでも発現する。そのことは、自分の心を他人に乗っ取られ、他人の意のままに統制されることに等しい。自分の心を動かせるのは自分しかいないという占有 (possession) の状態が、貨幣という異物によって自分の心が

動かされるという憑依 (possession) の状態に変化するのである。これはもはや真に迫った「深層演技」どころか、呪詛や催眠術を掛けられた状態、本物の忘我状態に入ることに近いであろう。

上衣を入手するためだけに有用な茶とは異なり、一般的等価物、特に貨幣は、全ての商品を手入するための交換手段に他ならない。またすでに述べたように、貨幣は「この貨幣」とか「このような貨幣」とかいった使用価値的な個性をもたず、100円玉は全て同じ100円玉として通用する。それゆえ貨幣にかんしては、他人が欲している貨幣のビジョンを思い描くことは不可能となり、かつ不要となる。いいかえれば、他人になり切ることは不要になる。他人になり切らずとも、自分自身が本気で貨幣を欲しているのである。

しかし、他人になり切ることが不要になると、演技そのものが不要になるかといえ、必ずしもそうではないことに留意しなければならない。むしろ、自分自身が本気で貨幣を欲しているために、地のままの演技、究極的な意味での「自然」な演技が可能になるのである。

地のままの演技も、演技であることに変わりはない。ただ通常の演技との違いは、それが「本物のふり」をする演技から、いわば「演技のふり」をする演技に変わることにある。誰もが貨幣を欲しがっている市場の内部では、自分だけがどんなに貨幣が欲しくないふりをして、やせ我慢をしているだけの「表層演技」にしか見えない。とはいえ、真心のこもった笑顔を作るための「深層演技」も、所詮は「本物のふり」をする演技の域を出ない。市場の内部で求められるのは、むしろ貨幣が欲しいという「演技のふり」をすることである。

これが演技の一種でしかないことは、市場の外部に一步出た途端、誰もが自分の金銭欲を人目に晒すことを憚り始めることから分かる。そのように、市場の内外で貨幣にたいする態度をあからさまに変えて見せるのは、自分が TPO

をわきまえて貨幣を求める心性をしっかりと統制できているというアピール、つまり貨幣に憑依された人間ではないかのような演技に他ならない。この演技では、「本物のふり」をする通常の演技とは違って、適度に芝居がかった振る舞いこそがかえって好ましくなる。

この振る舞い方には幅がある。吝嗇も贅沢も、たとえば表で吝嗇であるからにはそれだけ裏で金を貯めこんでいるはずだとか、表で贅沢であるからにはそれだけ裏で節約に勤しんでいるはずだとかいった具合に、どちらも貨幣を欲していることを見せつける効果をもつ点では変わりがない<sup>58)</sup>。質素儉約が美德として謳われる一方で、なぜか成金趣味も大手を振って罷り通るといのは、商業都市でよく見られる光景である。商売人がわざと商売人らしく、いかにも金儲けに目がないように振る舞ってみせることがあるのは、本当に金儲けに目がない自分を隠すための「演技のふり」なのである。

一見すると貨幣形態のフォーメーションは、どの商品所有者も自分が貨幣を欲しいから貨幣を等価形態に置いたにすぎないという具合に、各自の金銭欲に正直な各自の行動をただ集めただけのものに映るかもしれない。しかし、商品自体がその所有者たちに演技的な振る舞いを強いるものであったとすれば、そして商品の価値形態の展開とともにその所有者たちの演技のレベルも高度化するものであったとすれば、最後の貨幣形態に及んでいきなり全ての商品所有者が素のままの状態、演技以前の状態に戻るといのは、本来想定しにくい事態と考えなければならないであろう。

貨幣形態の背後に透けて見えるのは、嘘をついているように見せかけておきながら、その実、皮肉にも本心を述べているという二重反転の構図である。裏の裏はただの表のように見えるが、決してそうではない。貨幣をめぐる商品所有者の行動は、素のまま、心のままのように見えて、むしろ「深層演技」よりもさらに手の込んだ演技、いわば完全演技というべき域に達している

のである。

こうした観点に立つと、マルクス経済学の歴史観、すなわち商品経済はもともと生産過程とは無関係であったが、それがやがて社会の奥深くに浸透して、外部の生産過程を包摂するに至った結果が資本主義であるというお馴染みの歴史観にたいしても、これまでとは少し違った態度で臨むことが必要になる。

なるほど商品経済は、少なくとも直接的には、生産過程と無関係であったといってよい。しかしこのことは、生産労働に偏った労働概念に濾過されると、商品経済はもともと労働過程と無関係であったという内容に置き換えられてしまう。この置き換えは、『資本論』第1巻を流通形態論として純化するという宇野理論の方法の前提をなすものに他ならない。形態論的純化によって流通論から価値実体や「背後の生産関係」を捨象することは、本稿の3-1でも述べたように、事実上、流通論から労働そのものを捨象することを意味するのである。このように労働と生産とが同一視される以上、当然ながら流通形態は、産業資本が登場するまでは労働過程との接点をもたないまま、商品流通の枠内に限定された発展を示すだけであると考えられることになる。

この考え方は、もはや本稿にとって支持できるものではない。流通形態が最初に接点をもつのは、価値表現に関わる商品所有者の本源的な労働であった。生産労働が包摂されるよりも前に、むしろ流通労働（少なくともその原型）が包摂されるのである。したがってまた、産業資本の登場とともに労働過程に生じる変化は、たんに生産労働が（形式的・実質的に）包摂されることだけには止まらない。より根本的な変化は、生産労働を含めた人間労働全般の質の次元において生じるのである。

安く買うことの延長線上に安く作ることが位置づけられることを、原理論研究では「生産過程の流過程化」(宇野 [1964] 62頁)と呼ぶ<sup>59)</sup>。この呼び方を援用すると、貨幣を得るために生

産することは、貨幣を得るために販売することの延長線上に位置づけられるから、いわば「生産労働の流通労働化」と呼ぶことができよう。これは、産業資本の下における人間労働の変質を語るのに便利な用語になる。

流通労働に限らず、人間労働全般が「理性の狡智」に基づく媒介的活動であり、人間に特有の演技的性向に深く根ざしていることはすでに述べた。とはいえこの性向が、人間を相手にする流通労働に比べて、自然素材を相手にする生産労働ではそれほど表立たないこともすでに述べた。人間労働の変質が生じるのは、このように労働の種類によって目立ったり目立たなかったりする演技的性向の次元においてではない。その性向と実際の演技とを結びつける動機の次元においてである。

おそらく、いつの時代の生産現場にも、一生懸命働いている振りをしていてだけで、他人が目を離れた際に手を抜こうとする人間はいたに違いない。しかしその演技は、せいぜい当人の生来の怠慢心や横着心に発するもので、自分が楽をしたいからということの他には動機らしきものも見当たらなかったと思われる。どれほど巧妙な演技であったとしても、演技の動機そのものは単純であり、個人的であり、それゆえ純粋に主体的でもある。もしも怠慢心が人間の本能であるとすれば、本能に発する動物的な動機といってもよい。働きアリの2割は怠けアリであるというパレートの法則もある。

しかし資本主義では、流通労働であれ生産労働であれ、労働市場をつうじて動員される全ての有償労働は、例外なく勤労所得の源泉へと変わる。それゆえ、有償労働に携わる全ての人間は、当人の価値観と関わりなく、例外なく貨幣的動機を押しつけられる。労働をめぐる個人的動機の違いも、所得選好と余暇選好との比率など、貨幣的動機の強弱によって計られるようになる。自分が働きたいから働いただけだという単純な労働のあり方は、無償労働の世界を除くと、もはや資本主義のどこを探しても見当たらず

なるのである。

かかる状況の下における労働者の演技を、演技という言葉の通常の定義に即して、他人の目を欺くという意味で論じるだけでは十分でない。マルクスが述べたように、勤務内容が自分にとって十分魅力的であれば、放っておいても注意力が途切れることはないから (K., I, S.193, [1]313頁)、監督労働者の存在を無視して勤務に没頭することができるかもしれない。しかしどんなに勤務に没頭しても、それが有償労働であることに変わりはないから、貨幣の存在まで無視することはできかねよう。そのことは、職場に不満が生じた途端にはっきりとする。金が欲しいから働いているだけだと自分自身にいい聞かせて、勤務内容への不満をやり過ごすか、自分が働きたいから働いているだけだと自分自身にいい聞かせて、給与水準への不満をやり過ごすか、何れにせよ貨幣をめぐる、自分の心を騙すための演技を行わなければならない状況が生まれるのである<sup>60)</sup>。

ただむろん、働きたいというのが本心でないことはありえても、金が欲しいというのが本心でないことはありえない。したがって、貨幣的動機の強い労働者であれば、金が欲しいから働いているだけだと自分自身にいい聞かせるのに、それほど骨を折る必要はないかもしれない。貨幣的動機の弱い労働者ほど、外から押しつけられた貨幣的動機と自分の個人的動機とのギャップを埋めるために、いっそう本心に反した辛い演技を強いられることになる。

しかも、監督労働者の存在と違って、貨幣の存在はどこに行ってもついて回る。監督労働者の姿が見えなくなった瞬間に、彼の目を欺くための演技のスイッチを切ることはできるかもしれないが、貨幣の姿が見えなくなることは決してないから、自分の心を騙すための演技のスイッチまで切ることはできかねよう。スイッチが入ったままの状態にある演技は、日常との境目がなくなって、それこそ究極的な意味での「自然」な演技になる。貨幣をめぐる演技は、それ

が演技であることをもはや誰も自覚しないという意味でも、やはり完全演技と呼ぶのが相応しいのである。

## 結語

### (1)

本稿を締め括るに当たって、まず各節の結論を確認しておこう。

#### 第1節の結論

従来の原理論は、資本家本人が自分で自分の商品を売るという想定から出発していた。そのため、資本家以外の人間が行う流通労働は、資本家的活動に引きつけて解釈されることが多く、ほとんど労働過程論の主題とはならなかった。生産労働に偏った労働概念から抜け出す上で、鍵の一つを握るのは、流通労働の構造分析である。流通労働の目的は、むろん商品を売ることにあるが、その目的を実現するために顧客の手を取って強引に商品を掴ませるわけにはいかない。流通労働者が直接統制できるのは、自分自身の振る舞いだけである。その振る舞いをつうじて顧客の心理に働きかけることで、顧客自身が進んで商品を掴むように仕向けなければならない。この意味において流通労働は、人間労働が「媒介的活動」に他ならないことを端的に示すものであり、むしろ人間労働の典型の一つと見ることができる。

他人の心理に働きかけることを目的とした振る舞いは、何らかの役割設定に基づいた演技の形式を取る。「媒介的活動」は、演技的活動といいかえることができる。自然素材を相手にする生産労働では目的を隠す必要はないが、人間を相手にする演技では目的が透けて見えるのは禁物である。監督労働でも、他人の心理を読む能力をもった労働者を相手にする以上、わざとらしさを感じさせない「自然」な演技が求められる。従来の原理論では、監督労働は流通労働

とともに、資本家の固有の領分と考えられていた。しかし、資本家本人が現場で目を光らせるのは、「媒介的活動」としては不徹底である。上級労働者が監督労働を代行した方が、労働者から心理を読まれるおそれのない立場に資本家を置くために、労働者の心理への訴求力はかえって強まる。上級労働者は、実在の資本家よりもはるかに恐ろしい資本家の存在をイメージさせ、労働者の注意力を喚起するための道具になることで、監督労働の演技的効果を増幅する役割を果たすのである。

以上を踏まえると、これまで資本家的活動の延長線上に流通労働や監督労働が位置づけられてきたのとは反対に、むしろ流通労働や監督労働の側から資本家概念を捉え直す必要が出てくる。マルクスの資本家概念は、自然人としての個人資本家の存在を強く想起させる内容になっている。しかし個人資本家は、「資本の人格化」という役柄を演じる役者として見た場合、演技の幅に物理的制約が働く点において法人格よりも格落ちになる。この落差を埋め合わせるのは、監督労働でいえば上級労働者である。上級労働者も自然人には違いないが、彼がイメージさせる「資本家なるもの」は物理的制約を超越しているために、本物の資本家のように「資本の人格化」という役柄との違和感を感じさせないで済む。たんなる代理人の立場を超えて、本物の資本家以上に資本家らしい存在になるのである。こうした反転現象は、信用貨幣にも見られる。信用貨幣は、名目貨幣のように市場の外部の権威を象徴するわけではないが、その紙製の身体によって生身の金以上に貨幣らしい「貨幣なるもの」をイメージさせる。貨幣と労働との同型性は、労働理論にとって深く探求するに足るテーマとなる。

## 第2節の結論

流通労働と監督労働とをめぐる議論は、労働の目的についての構想を立てる労働にも適用できる。これまで構想労働は、構想を思い描いて、

それを自分の心像の内部から取り出すという内容で説明されてきたから、始めから終わりまで一人の人間が担当する以外にない労働であるかのように考えられやすかった。しかし、構想労働も人間労働であるからには、過去の構想を素材に選んで、それにアレンジを加えるだけの「形を付ける労働」の域を超えることはない。構想の素材を選ぶことと、そのアレンジの仕方を決めることとは別個の作業である。また、自分の心像の内部から構想を取り出すには、過去の構想についての知識を始めとする何通りものヒントが必要になる。構想を思い描いたのは自分であっても、それを取り出すためのヒントは誰からも見える状態で存在している以上、自分でなくても提示することができる。他人にヒントを提示するのは容易ではないが、何が自分にとってヒントになるのかは自分でも分からないから、他人にヒントを提示されるのは迷惑だという理屈は成り立たない。構想労働も生産労働と同様、多次元にわたる分業の可能性と必然性をもつのである。

建築家の構想は、設計図として表現された後で、建物として実現される。しかし多くの場合、構想労働と呼ばれるのは構想を表現する「頭の労働」だけであり、それを実現する「手の労働」は含まれない。また多くの場合、構想労働はもっぱら個人の才能がものをいい、他人との比較が難しい労働であるために、肉体労働におけるような技能や熟練の育つ余地も乏しいと考えられやすい。この考え方は、構想労働の分業の可能性を否定する考え方とも繋がっている。しかし構想労働を、過去の構想という素材の上に、記号という道具を用いてアレンジを加えるだけの「形を付ける労働」として捉え直すと、これらの考え方が偏見にすぎなかったことが分かる。記号が道具の一種（文化的道具）であるとすれば、記号を用いることは、物理的道具を用いることと同じ「手の労働」としての側面をもつことになる。記号は公共の道具であるから、その定義を個人が勝手に書き換えることはできない。

しかし、表現される構想が一種類に決まっています、それを表現する記号の定義が一種類に決まっていますが、記号の組み合わせ方までが一種類に決まるわけではない。この組み合わせ方の良し悪しに、構想労働における技能や熟練が現れるのである。

構想労働において分業が行われると、構想労働全体のあり方自体を構想する「構想の構想」という労働領域が顕在化する。監督労働も、労働組織全体のデザインをめぐる「構想の構想」にまで関与する。しかしマルクスの労働過程論は、職人型の個人労働をベースにして組み立てられているために、誰が構想を立てるかは問われても、誰が「構想の構想」を立てるかは問われない。また同じ理由から、誰が労働を行うかは問われても、誰が労働の結果を消費するかは問われない。しかし何を作るかは、作ったものを誰が使うかによって変わる。消費のイメージを固めるための流通労働は、構想労働と深く結びついている。構想労働と同様に、流通労働も、分業が不可能な労働であるという偏見の下に置かれてきた。流通労働の根幹をなす価格交渉や情報収集は、もっぱら資本家の個人的手腕がものをいい、資本家本人が担当する以外にない聖域的労働であるかのように考えられやすかった。しかしこれらの労働を、顧客の心理に訴えかける演技的活動として捉え直すと、ものをいうのは資本家のイメージを使いこなす流通労働者の演技力であって、資本家個人のセールス能力ではないことが分かる。

### 第3節の結論

貨幣と労働との同型性を深く探求するためには、価値形態論を労働過程論の観点から再考する必要が生じる。どんな他商品を等価物に選んでもよいが、実際に選んだ他商品だけが価値表現の目的として設定されるという価値表現の構造は、どんな構想を思い描いてもよいが、実際に思い描かれた構想だけが労働の目的として設定されるという人間労働の構造に重なる。また、

心像の内部に宿された構想と商品の内部に宿された価値とは、どちらも外から覗き見ることができないため、構想や価値を実現するためには、まずそれらを目に見えるかたちで表現するステップが省略できない。ただ、表現と実現とは直結するわけではなく、それらの中間に解釈というステップが挟まる。構想自体は一義的でも、それを表現する記号は多義的であるから、表現された構想は、思い描いた構想とは多少なりとも違う内容で解釈されることが避けがたい。建築家の構想を表現した設計図には、「このような建物」という観念性がつき纏うのである。価値表現も同様であり、自商品綿布の価値表現に使われる他商品上衣は、綿布所有者の心像の内部にある「この上衣」とは違う「このような上衣」になる。しかも他人の目から見ると、自商品綿布も「このような綿布」のなかの一つとして映る。したがって綿布所有者は、「このような綿布」の所有者という役柄から逸脱しないように振る舞わざるをえない。綿布にも上衣にも同種商品が多数存在するという商品世界の状況自体が、商品所有者に演技的活動を強いるのである。

商品所有者の演技的活動は、商品の価値形態の展開とともにいっそう手の込んだものになる。駆け引きの横行する商品世界では、自商品が自分にとって無用な「他人のための使用価値」であることを悟られないように振る舞わなければならない。また、他商品への切実な欲望を、切実な状態のままに人目に晒すことにも強い抵抗が働く。「拡大された価値形態」は、本当に欲しい他商品を複数の等価物の列のなかに紛れ込ませるカモフラージュ効果をもつ。綿布所有者自身にとっては、上衣以外の等価物は、上衣を入手するための交換手段にすぎない。しかし、上衣の交換手段として茶を求めるためには、他人の構想を読み解く解釈者の構想力を働かせて、上衣所有者が欲している「このような茶」がどのような茶であるかを洞察しなければならない。自分で飲むわけではないからどんな茶でも構わ

ないというのが本音でも、その本音に蓋をして、本心から茶を欲している人間の役柄を演じる必要が出てくる。商品所有者の演技は、自分の心の領域にまで踏み込んだ「深層演技」に転化せざるをえないのである。この転化には、手段にすぎなかったものが目的化する物神性の契機がすでに芽生えている。

演技には、その気になればいつでも役柄に入り込めるし、いつでも役柄から抜け出せるという強い統制能力が求められる。この能力は、労働が合目的的性格をもつための前提でもある。迫真の演技と本物の忘我状態とは、紙一重の違いしかないようでも決定的に違うのである。しかし貨幣形態まで来ると、貨幣にたいする欲望を自在に統制することはできなくなるため、それまで積み上げてきた演技のセオリーは無効化する。そのことが契機となって、商品所有者の演技的活動は、「本物のふり」をする通常のセオリーから「演技のふり」をする特殊なセオリーに切り替わる。貨幣形態ではそれまでの価値形態とは異なり、誰もが自分の貨幣欲に正直に行動しているだけに見えるが、その深層には依然として演技論的文脈が継続している。誰もが金儲けに目がないように振る舞うのは、本当に金儲けに目がない自分を隠すための「演技のふり」である。貨幣形態をもって商品の価値形態が完全になるとともに、商品所有者の演技的活動も、「深層演技」以上の完全性を具えるに至るのである。

## (2)

マルクスの労働過程論が、生産労働を強く念頭に置いた内容になっていることはすでに再三にわたって述べた。かかる労働過程論のなかで構想力の存在が説かれているために、構想労働は、おのずから生産労働の一範疇として理解されてきたように思われる。「手の労働」から分離された「頭の労働」とは、たとえば商品の企画・開発・設計に携わる労働であり、それらの労働が行われるのは製造業においてであるとい

う理解である。

しかし本稿の議論をつうじて明らかになったように、構想労働の本質は、むしろ流通労働のそれと重なるところが多い。何れの労働でも、自分または他人が欲しいものを思い描くことが必要になる。作られたものをただ売るだけであれば、建築家のように構想力を働かせなくてもよいとはいえない。建売住宅の販売員は、顧客が住宅に求めている快適性や利便性の中味を理解しなければならないのであって、それは建築家が図面を引く上で理解しておくべき事柄と違わないのである。

ただこのように、構想労働を生産労働から引き離し、流通労働に引きつけて理解することは、悪くすると「生産労働＝手の労働＝単純労働」と「流通労働＝頭の労働＝複雑労働」とを対置するだけの平板な二分法的思考に陥ってしまうおそれがある。工場における監督労働も、市場における流通労働も、自分自身は過程の内部に入り込まず、他人を働き疲れさせて自分の目的を達成しようとする「媒介的活動」であることには変わりはない。労働概念を深く掘り下げするためには、生産労働と流通労働との間に引かれてきた従来の区分線をいったん消去して、構想の表現と実現との間に新たな区分線を引くべきなのである。

構想の表現は、言葉や図像などを用いた抽象化の過程になるが、構想の実現は、素材や道具などを用いた具体化の過程になる。しかし具体化のためには、抽象的な建築図面を解読できる能力の裏づけが欠かせない。自分で構想を表現できなくても、他人の構想を理解できる知的能力である。これは、他人の書いた建築図面を解読できる建築家の能力と変わらない。作曲家も演奏家も、読譜能力では大差がないし、小説にかんする一般読者の知識は時に小説家のそれをすら上回る。決定的な違いは、他人の書いた楽譜や小説を、自分の構想を表現するためのヒントとして活用できる能力（いわゆる表現力）の違いにあるのであって、構想力の違いにあるわ

けでは必ずしもない。小説を読んで具体的な情景を思い浮かべる能力は、一般読者にもある。抽象化と具体化とは、構想力において均等の比重を占めるのである。

マルクスの労働過程論は、構想の送受信可能性という認識を出発点に据えていたにもかかわらず、構想を送信する側の構想力ばかりに光を当てて、それを受信する側の構想力を無視するに等しい結果になっている。したがって、「構想と実行との分離」という命題は、「実行」の段階における構想労働の契機を後退させるおそれがあるものとして警戒すべきである。しかも、この命題を「頭の労働と手の労働との分離」という命題に置き換えることは、さらなる理論的なエラーの危険性を孕んでいる<sup>61)</sup>。

おそらくどちらの命題も、構想を表現できるのはそれを心像のなかに描いた本人だけであるという発想に立脚していよう。本人から分離できるのは、誰でもできる「実行」だけであり、誰でもできる「手の労働」だけであるという発想である。この発想はまた、構想力を無から有を作り出す能力として神聖視する俗見、いわば独創性にまつわる神話にも通底する。

しかしすでに述べたように、構想労働にも分業の可能性があり、さらには熟練解体の可能性もある。構想力、なかでも市場をつうじて調達可能なタイプの構想力は、無から有を作り出す錬金術師さながらの特殊能力などではなく、過去の有をリニューアルして引き継ぐ能力、いわばアレンジ能力の範囲に収まるものと考えなければならない。ノーヒントで考える能力ではなく、適切なヒントを拾い集めて、それを使いこなす能力である。

ヒントになりそうなものを拾い集めるためには、たとえば近年のサスペンス小説の流行でいえば「連続殺人鬼」や「偽装誘拐」など、自分の構想の鍵になりそうな単語を特定して、同じ単語が用いられた過去の小説に当たることが必要になる。そのためにはまた、過去の小説の鍵になっていたさまざまな単語を特定して、それ

らを見やすい順序に並べた索引を（記憶のなかでも）作成しておく必要がある。これらの作業は、どんなに専門的な仕事に見えても本質的にはキーワードの登録・検索であるから、単純化できるだけでなく、OAやITなどを用いて自動化もできる。せめてキーワードの特定くらいは自分でやる必要があるように見えるが、これも、あらかじめ小説の冒頭で指定されている場合は省略できるのである。

もともとマルクスの定義によると、構想力とは、労働の結果についてのイメージをあらかじめ思い描く能力である。イメージを思い描いてから所期の結果を得るまでには、労働時間と呼ばれる一定の時間が掛かる。さらに、その結果を得てから所期の有用効果を得るまでにも、生活時間と呼ばれる一定の時間が掛かる。思い描いたイメージが即座に形になり、即座に消費されるわけではない。

したがって構想労働では、タイミングが殊の外重要な意味をもつ。指定された納期までに形にならない構想では意味がないし、即座に消費できなければ期限切れになってしまう構想でも意味がない。構想労働には、構想を最終消費のラインに載せるまでの所要時間を計算し、その間に起こりうる需要の変化や生活環境の変化までを先取りできるような、きわめて高度な計画性が求められるのである。この計画性に基づいた進捗管理は、工場労働や肉体労働だけに固有の問題ではない。

ここでの時間計算には、構想を表現・実現するための方法と順序との選択という問題も絡んでくる。すでに述べたように、建物の設計図を引くことと、建築作業の手順書を作成することとの間には違いがある。設計図を自分一人で引くことと、何人かで分担して引くこととの間にも違いがある。

マルクスの労働過程論には、誰が労働の目的を設定するかという論点だけでなく、その目的をどのように実現させるかという論点も抜けている。それゆえ、ともかく誰かが労働の目的さ



え設定すれば、それを実現するための労働手段とともに、作業手順も自動的に決まるかのような議論になっている<sup>62)</sup>。しかし、目的は一種類しかなくても、それを実現するための方法や順序は何種類もあるというケースは珍しくない。というよりも、同一産業部門内に複数の生産条件が共存しているという市場価値論の想定からすれば、本来このケースこそが常態であると考えてよいはずであろう。また、マルクスの資本主義的生産方法の発展にかんする議論は、プロセス・イノベーションの問題に徹していて、プロダクト・イノベーションの問題を含んでいないというのが定説になっている。協業・分業・機械制大工業のなかからどの方法を選んでも、生産物(労働の目的)そのものに変化が生じるとは想定されていないのである。

どの方法や手順を選ぶかによって、構想を最終消費のラインに載せるまでの所要時間の相当部分(生産期間に該当する部分)は変わる。同じ問題は、構想を表現するための方法と順序との選択にも起こる。同じ建物の構想でも、それを平面図で表すか、立体模型で表すか、図や模型の色づけまでを行うかどうかによって、構想を表現するための所要時間も変わってくるのである。それゆえ、指定された納期からの逆算によって、方法や手順が限られてくることもある。果たせるかな、マルクスの労働過程論には、誰が労働のタイミングを設定するかという論点も抜けているわけであるが、これは重大な盲点であったと考えられる。

しかも、タイミングの問題さえクリアできれば十分かといえば、決してそういうことにはならない。予算内で形にならない構想では意味がないし、現在利用できる材料や道具で形にならない構想でも意味がない。構想労働には、販売部や資材調達部における流通労働に求められるのと同様に、費用計算の能力も求められるし、幅広い商品知識も求められるのである。しかも、構想を実現することだけでなく、それを表現すること自体にも労力や資材が掛かる。建物の設

計図を構想する労働には、設計事務所のあり方を構想する労働、すでに述べた「構想の構想」という労働が絡んでくる。事務所の事業主である建築家には、工場経営者に求められるのと同様に、人事にかんする事務処理能力までが求められるのである。

構想力がこれら多種多様な能力の総称であることを踏まえると、一人の人間、それも平均的な「普通の人間」(K., I, S.59[1]87頁)が、構想力の一式を取り揃えているように読めるマルクスの説明に無理があったことは、もはや疑念を挟む余地がなくなるのではないか。

マルクスが例に挙げている建築家だけでなく、たとえば小説家も、メ切という時間的制約や、紙数や部数にかんする物理的制約の下で構想を練り上げるしかない。その傍らには、原稿管理を代行する助手や、スケジュール管理を代行する編集者などが常駐しているのが普通である。しかも彼らが行うのは、たんなる単純労働だけではない。読者の声を代弁すべく、アイデア出しの段階(企画会議)に関わったり、作家の草案にダメ出しをしたりすることも珍しくはない。編集者に督促されて必死に筆を走らせる小説家は、むしろ資本家に監督されて必死に働く労働者の姿を彷彿させよう。仕上がる構想は一種類しかなくても、それを仕上げる構想労働の内部には、無数の工程が存在し、無数の統制=被統制の関係が交錯しているのである。

### (3)

本稿の3-3で貨幣の物神性にかんして述べたように、統制=被統制の関係の裏面には、所有=被所有の関係が貼りついている<sup>63)</sup>。労働と所有との関係は、労働所有権をめぐる議論などで想定されるように、生産過程が終了し、生産物が得られた時点をもっていきなり発生するわけではない。その関係の発端は、生産過程の始まる時点にまで遡る。しかしまたその発端は、マルクスが力説した点、つまり誰が生産手段(労働組織の発揮する集団力も含めて)を所有する

かという点だけに集約されるわけでもない。むしろ重視すべきなのは、誰が労働者の心身の統制権を握るかという点、つまり誰が労働の目的を設定するかという点である。

改めて確認するまでもなく、人間労働の特質は、意志の力をもって目的を追求する合目的性格に求められる。しかしその際、同時に複数の目的が追求されることはないことに留意する必要がある。注意力は、一つの目的にたいする緊張状態を持続するためだけに限定的に使われなければ機能しない。現在ある仕事を遂行している労働者にたいして、横から別の仕事を割り振っても、労働の妨害をすることにしかならないのである。

したがって、彼に別の仕事を遂行させたい人間は、途中で割り込むのを諦めて、現在の仕事が終わるまでおとなしく待っているしかない。その間この人間は、ただ他人が食事をしているのを拱手して見ているしかない一文無しのような立場に置かれることになる。つまり、最初に労働の目的を設定した人間が、他人の意志による遠隔操作が及ばない占有状態に労働者の心身を置くのである。

それゆえ資本主義的生産では、労働の目的を設定する権利をめぐる不可避的に利害の衝突が生まれる。生産手段は資本家の私有に委ねる代わりに、何を生産するかは労働者たちが自主的に決める、というわけにはいかない。第一それでは、資本家が何を生産手段として私有するかも労働者たちが決めることになってしまおう。労働者による自主的な品質管理といっても、資本がこの管理権を労働者に委譲できるのは、品質管理という目的自体は資本が設定しているからである。

とはいえこのことから、労働の目的は一つの資本に一つしかなく、それを一人で設定する人間がどこかに存在していて、その個人が資本の労働過程全般のコントロール権を一手に握るのだと早急に結論づけるべきではない。そう結論づけたのでは、これまで再三警戒していたにも

かわからず、あと一步のところ「頭の労働と手の労働との分離」という古典的な図式の罠に嵌ってしまうことになる。構想労働のなかには、どうしても分離することができない独創的な領域、いわば「構想それ自体」があり、それは個人労働として行われる以外にないという謬見の罠である。

一度に一つの目的しか遂行できないという労働の原則は、構想労働にも当てはまる。構想力は、いかなる労働の目的も設定できる代わりに、一度に一つの目的しか設定できないし、いったん設定した目的を自在に解除することもできない（目的以外の事柄には目が行かなくなる）。一つの構想を思い描くことは、それ以外の構想を頭から締め出すことを意味してもいるのである。

こうしたコントラスト、すなわち構想力は汎用性をもつが、構想は特殊性をもつというコントラストは、奇しくも、価値は普遍的であるが使用価値は個別的であるという「商品の内的矛盾」に重なるところがある。価値が実現することでようやく使用価値的制約が解除されるように、一つの構想が形を現すまでの間は、別の構想を頭に宿す機会を見送り続けるしかない。これはいわば、「構想の内的矛盾」といってよい。この矛盾を解決するためには、一人の人間の頭から締め出された構想を、別の人間の頭に宿す必要がある。つまり、複数の人間によって、複数の構想を同時進行的に練る必要がある。ある労働者が一つの仕事を終えるまで待っている代わりに、別の労働者に次の仕事を振るのと同じやり方である。

このことを踏まえると、もともと構想が一種類しかなく、その構想がそのまま労働の目的として設定され、一種類の生産物へと結実するという従来の図式（いわば非結合性の命題）は、構想労働を行う人間が一人しかいないという想定に基づくものであり、かなり無理のある労働過程の図式であったことが分かる。

周知のように商業資本は、さまざまな商品種

を取り揃えることで使用価値的制約を解除しようとする。産業資本も、商業資本には遠く及ばなくても、できるだけ特定の商品種に縛られないように生産過程を操業しようとする。そのための手法の一つが多品種生産であり、もう一つが複数の産業部門への分散出資(または多角化)である。G—W…P…W'—G'という周知の図式は、したがって現実の産業資本の運動を図式化したものというよりは、商品の価値形態でいえば「簡単な価値形態」に当たるような思考実験的な仮定にすぎないものと考えべきであろう。現実のWは、複数の商品種からなる $\sum_{k=1}^n W_k$ なのである<sup>64)</sup>。

nの数値が増えるのに応じて、労働の目的は複数化し、構想労働も集団化する。たとえnが1になるとしても、まず複数の構想が立てられ、それらがコンペに掛けられ、時にはそれぞれの構想に基づいて作られた複数の試作品が比較検討された後で、最終的な構想が一つに絞られるというのが標準的な手順になる。

こういえば、自然と想起されるのは結合生産の問題であろう。この問題にかんしてよく取り上げられるのは、石炭ガスの生産をつうじてコークスが生まれるとか、綿糸の生産をつうじて綿屑が生まれるとかいった事例である。しかしこれらの事例とは違って、主産物と副産物との区別はいつでも事前に確定しているわけではない。少品種大量生産の代名詞とされるフォードシステムにおいてすら、T型モデルの爆発的な成功が明らかになる直前までは、N、R、S型の小型車や、K型の高級車の並行生産が行われていた。T型モデルの構想は、見方次第では、その他のさまざまなモデルの構想の犠牲の上に成り立った合作であり、それ自体が結合生産物であるともいえるのである。

このことはすでに述べたように、構想労働の要件のなかに、構想が形になる将来時点の需要を先取りする計画性が含まれていたことから演繹できよう。ピンポイントの将来予測は、も

とより人智を超えた領域にある。求められる構想が複雑になって、構想期間が長引くほど、将来時点の需要を捉え損なうリスクは大きくなる。一人の頭のなかにある一種類の構想だけで将来時点の需要を狙い撃ちしようとするのが無謀であれば、何人かの頭を使って複数の構想を用意する以外にない。構想労働も肉体労働と同様、集団労働として遂行されうだけでなく、されざるをえない必然性を帯びている。

しかも構想労働では、労働手段(事務機器)の汎用性もきわめて高くなるから、労働手段を共同使用することによる節約効果も、肉体労働以上に高くなる可能性がある。個人労働の最たるものと目されがちな構想労働こそ、実は協業に向いているといえなくもないのである。

#### (4)

このように構想労働も含めて、人間労働が一般的に集団作業としての性格を帯びているとすれば、協業論のなかで論じられるのが通例である集団力や競争心についても、冒頭の労働過程論のなかで予備的に考察しておく必要が生まれよう。

これらは何れも、冒頭の労働過程論のなかで論じられる注意力と密接不可分な関係にある。集団力の根幹をなすのは、全員が同じ目的に向かって同時に注意力を振り向けるという同期化作用であり、競争心の根幹をなすのは、一人では散漫になりかねない注意力を他人の存在を意識することで引き締め合うという同調作用である。たとえ労働者たちが集まっても、互いの足並みが揃わなければ集団力は損なわれてしまうし、互いに相手の存在に無関心になれば競争心も覚醒されることなく終わってしまう。協業が効果を発揮するかどうかは、やってみないと分からないのである。

大掴みにすれば、マルクスの労働過程論は、一方に自然や対象を置き、他方に人間や主体を置くとか、一方に身体や手足を置き、他方に頭脳や意識を置くとかいうように、異質な二要因

間の対向関係を軸に組み立てられていると  
いてよい。これは、二要因の内のどちらか一方  
によってイニシアティブが握られる関係でも  
あるから、統制＝被統制の関係として捉え直  
すこともできる。この関係のなかで人間や主  
体は、自然や対象（労働対象や労働手段）を  
自らの頭脳の統制下に置いて、労働過程全  
体のイニシアティブを握る立場にあるとい  
うのが、マルクスの労働過程論の大意であ  
る。その際、人間や主体が自分たち自身を  
統制下に置くことは、当然の前提と考えら  
れている。

しかし他の労働者との集団関係は、個々の  
労働者による統制の及ばない次元にある。自  
分一人がどれだけ頑張っても集団力は生ま  
れない。もっとも、自分一人が手抜きをし  
るだけで集団力が損なわれる場合はあるか  
もしれないが、誰が手抜きをしたのかが簡  
単に特定されてしまう条件の下では、手抜  
きをすることにも競争心による強い自制が  
働く。競争心は、集団のなかで自分だけが  
一人勝ちしたいという独占欲よりは、むしろ  
自分だけが集団から落ちこぼれたくない  
という心理、いわば帰属本能に近いもので  
あろう。これは、人間と動物との違いを強  
調していたはずのマルクスが、人間の競争  
心から生まれる活力を「animal spirits」と  
呼んだ所以とも思われる（K., I, S.345,  
[2]174頁）。そして本能である以上、競  
争心による自制は意のままに解除できるわ  
けではない。

このように個々の労働者は、自然や対象  
を統制する立場に置かれる一方で、他の労  
働者との集団関係から発生する同調圧力  
や競争圧力によって統制される立場にも置  
かれる。しかもこれらの圧力は、すでにくり  
返し述べてきたように、個々の労働者が他  
人の目を意識して演技的に振る舞うこと  
でいっそう強められる。

人間は、帰属本能のままに行動できる動  
物とは違って、自分で自分を理性的に統制  
できているかのような姿で他人の目に映る  
ことを欲する。したがって人前では、競争  
心をむき出しにしないように努める。その  
ことがかえって、一度熱

した競争心を冷めにくいものにしてしま  
うのである<sup>65</sup>。市場では「意図せざる結  
果」が頻発するが、工場では意図した通り  
（構想通り）の結果しか起きない、それゆ  
え流通は不確定性をもつが、生産は確定  
性をもつという二分法的思考は、こうした  
、相手の腹の裡を探り合ってしまう人間  
ならではの被統制的な側面を無視した考  
え方であろう。集団力や競争心は、人間  
の生み出したものには違いないが、人間  
の意のままにならないという意味では、  
むしろ「自然力」の範疇に属するのであ  
る。

以上を踏まえると、マルクスがヘーゲル  
から借りた「理性の狡智」という概念には  
、物質代謝という概念がそうであったよ  
うに、労働過程論にとって功罪両面があ  
ったように思われてくる。

この概念は、理性の媒介的性格を浮き  
彫りにすることで、人間労働が創造的活  
動であるという固定概念から抜け出すた  
めの手掛かりを与えてくれる。しかしその  
反面、自分では働かずに諸客体の働きを  
観察するだけの人間がどこかに存在して  
おり、彼の理性が一切を操作している  
という図式を思い浮かべやすくなる。全  
てを自分一人で作れる人間がいるとい  
う神話的理解を斥ける代わりに、それと  
は別の神話的理解、全てを自分一人で  
作らせられる人間がいるという理解を  
招き寄せかねない側面があるわけであ  
る。この側面は、理性は——おそらく心  
理・感情も——あくまで個人に帰属する  
資質であり、分割もできなければ合成も  
できないという通念を受け入れるとき、  
さらに強められよう。

しかしこの通念は、構想労働における  
分業の可能性が明らかになった現段階  
では、もはや素直に受け入れるわけには  
いかない。たとえ構想の原案を立てた  
のが個人であっても、その原案を集団  
で練り上げた場合、最終的な構想をま  
とめた人間を特定することはできな  
くなる。その場合、自分の構想を他人  
に実現させようとする「理性の狡智」  
も、特定の個人の資質に発するわけ  
ではないものになる。マルクスが集団力と

呼んだのは、全員が力を合わせて重い荷物を引き揚げるとか、バケツリレーをすとかいった類の「手の労働」における能力のことであるが、「頭の労働」においても同種の能力は生まれる。集団心理や組織感情と呼ばれるものが存在するように、構想労働における分業には、誰のものでもない集団理性と呼ぶべきものが存在するのである<sup>66)</sup>。

「理性の狡智」とは「自らは直接この過程に入り込むことなく、しかも自分の目的のみを達成する媒介的活動のこと」を指すというヘーゲルの定義は(Hegel [1830] [訳] 205頁)、「自分」は一人の主体であり、主体の数だけ異なる「自分だけの目的」があることを暗黙の前提に置いているように読める。そう読めるからこそ、労働者間の関係を捨象したマルクスの労働過程論のなかに違和感なく取り込むこともできたのであろう。「自分たちの目的」を追求する集団理性の存在は、この暗黙の前提によって封じ込められている。

むろん、集団力が資本の所有物になる資本主義では、特定の誰かが考えたわけではない集団の構想も、その集団を雇用している資本によって占有される。この状態は、特許権や意匠権や著作権など、知的財産を囲い込むためのさまざまな権利を設定することで保持される。市場原理の浸透が、誰のものでもない「自然力」の領域にまで及ぶことを示す一つの事例である<sup>67)</sup>。しかしそのことをもって、資本が「理性の狡智」を独占し、労働過程の全てを統制していると見るのは、ヘーゲルの暗黙の前提を共有するのに等しい結果になろう。

何かを統制するためにはそれを所有しなければならぬという必要条件と、何かを所有すればそれを統制できるという十分条件とは同義ではない。どんな馬主でも、自分の馬を上手に乗りこなせるとは限らない。ましてや、自分が親権をもっている子供でも、自分の思い通りに育ってくれるとは限らない。こうした所有と統制との乖離が、人間労働の演技的な側面とも深

く関わっていることは、もはや詳論するまでもないであろう。自分が所有物のように扱われることに不満を募らせた労働者は、「自分たちの目的」を秘かに「自分だけの目的」を切り替えて、上辺の協力的態度を装うことばかりに理性を働かせるかもしれない。誰のものでもない集団理性は、誰かがその所有権を主張し始めると、急速に萎えてしまうかもしれないのである。

## 注

- 48) ただつけ加えれば、道具が歴史的に進化するように、価値表現のやり方も「簡単な価値形態」を脱して高度化を遂げる。
- 49) 宇野は、特定の目的を追求できる合目的性格よりも、むしろ「それぞれの目的にしたがって種々なる作業をなしうる」可塑性の方に、人間労働の特質を求めている(宇野編 [1967] 234頁)。  
宇野によれば、「種々な作業に任意に転換しうる」からこそ労働なのであって、一種類の作業しかできないのはたんなる仕事である、それゆえ「機械や家畜は、仕事はするにしても、労働はしない」というのである(宇野編 [1967] 238頁)。こうした作業・仕事と労働との区別は、広く行われている Work と Labor との区別に比べて、かなり独白色の強いものといえるであろう。宇野編 [1967・68] II, 222頁も参照せよ。
- 50) 資本の流通過程で行われるのがたんに価値の姿態変換と呼ばれるのにたいして、生産過程で行われるそれは、価値の実質的姿態変換と呼ばれることがある。これは結果の次元ではなく、原因(使用価値形成的な労働が投入されているかどうか)の次元における区別であろう。マルクスが「形を付ける」といういい方で意味しているのも、素材の姿態変換のことであり、価値の姿態変換のことではない。
- 51) 価値形態論における交換要請の側面と価値表現(または価値評価)の側面との関係をどう読み解くかについては、拙稿 [2008a] (2) 3-12頁、拙稿 [2008b] 76-78頁を参照せよ。
- 52) どれほど店頭で魅力的に見えた商品でも、家に買って帰ると急に色褪せて見えるという経験は誰しもある。おそらくこのギャップは、店頭では見本としての衣装を身に纏っていた商品が、家ではその衣装を脱ぎ捨てて、たんなる現物に変わってしまうことに

起因しよう。流通労働者にかんする議論のなかで述べたように、実際に本人に会ってみると、思い描いていたイメージが崩れてしまうのと同じ現象である。拙稿 [2007] (1) 6-11頁も参照せよ。

- 53) 構想労働が必要であったのは、生産過程だけではない。生産過程に続く流通過程にも、相手の欲望内容を思い描いたり、相手に商品を手に取らせたりする方法を思い描いたりする構想労働が必要であった。ただ、これらの過程は何も、資本循環の枠内に収まっている。その枠外に目を向けると、構想労働の範囲は、流通過程に続く消費過程にも及んでいることが分かる。

商品を消費することも、その商品の使用目的を思い描き、それをさまざまな使用方法を用いて達成しようとする合目的性格を具えており、消費労働として捉え直すことができる。また、食材の調理や盛りつけ、パソコンの設定、家具の組み立てなど、消費者自身に負担される最終仕上げの段階での労働は少なくない。布地を買って「この上衣」を縫ったり、「このような上衣」を買って「この上衣」に仕立て直したりするのも、そうした消費労働の一例といえるであろう。

個別受注生産でもない限り、自分が思い描いていたイメージと寸分違わない「この上衣」を市場で調達することには無理がある。イメージとのギャップは、自分で埋める以外にない。最終仕上げをやり損なえば商品の使用価値も実現されずに終わる可能性があるという意味では、これらの消費労働は、生産的（使用価値形成的）な性格を具えてもいるのである。

消費労働については、小幡 [1993] 26-30頁、小幡 [2009] 104-105頁、小幡 [2014] 64-65頁を、労働・消費・生活の連続性については、山口 [1985] 83-84頁を、それぞれ参照せよ。また高橋 [1988] は、生産が消費に先行するという通説的理解にたいして、「主体的意識の上では消費が目的であり、生産行為は消費行為のための手段を提供するという形で、生産行為それ自身が目的たる消費行為にたいして手段として立ち現れる」（262頁）という独自の理解を対置し、消費行為の目的を設定する行為を出発点に据えた生産過程論の構築を試みている。

- 54) 阿部 [2010] は感情労働を、不特定多数の顧客と短期間だけ関わる A タイプ（ファストフード店の店員や客室乗務員などの感情労働）と、特定の顧客と

長期間にわたって関わる B タイプ（看護師や介護士などの感情労働）との二類型に分けた上で、B タイプには、A タイプでは有効なマニュアルによる画一化が馴染まないと指摘している（67頁）。

その上で、従来の感情労働論では A タイプが取り上げられることが多かったため、考察の観点が「個対個」の関係に偏りがちであったが、B タイプでは「集団対集団」の関係が前面に出るため、感情労働は「演技というよりもむしろ演劇といった様相を呈することになる」と述べている（70-73頁）。対人サービス労働の集団的性格については、阿部 [2015] 79-81頁も参照せよ。

阿部の区別を援用していえば、本稿が論じている商品所有者の演技は、さしずめ A タイプと B タイプとをかけた混合型ということになる。綿布所有者の演技は、上衣所有者だけに向けられたものではなく、隣り合う他の綿布所有者にも向けられたものであるから、その限りでは「個対個」の関係に徹しきれない B タイプに当たる。しかしまた大道芸と同様、演技の途中で次々と観客（上衣所有者であれ綿布所有者であれ）が入れ替わるのが当たり前であるから、その限りでは「集団対集団」の関係に徹しきれない A タイプに当たる。

A タイプと B タイプとの区別は、観客が「個」であるか「集団」であるかをはっきりと区別できるという想定に基づいていよう。確かに接客労働であれば、演技または演劇の観客は、乗客であれ患者であれ、ともかく労働者が接することのできる——姿を目視することもできる——近距離に存在していることが前提になるのかもしれない。しかし商品世界では、この前提自体が成り立たなくなる。それゆえ商品所有者の演技には、個人演技と集団演劇とのどちらとしても鑑賞に堪えるだけの、総合的な出来栄の良さが求められるのである。

- 55) 小幡 [1988] 47-51頁、小幡 [2009] 38-39頁を参照せよ。

56) 商品の物神性のもつ固有の意義については、拙稿 [2009・10] (1) 18-27頁、拙稿 [2014・15] (1) 41-46頁を参照せよ。

- 57) 小幡 [1988] は、二つ前の注55でも引いたように、間接交換への志向が「簡単な価値形態」から「拡大された価値形態」への展開の動力をなすものと見ている。小幡によれば、この志向が生まれるのは、どうしても上衣を入手したいという「情念」のこもっ

た綿布所有者の欲求が、上衣所有者の「欲求の憑依」を招くからであるという(50頁)。

また小幡[2009]も、「拡大された価値形態」の項の末尾において、「手段を自己目的化する人間に特有な性向」というフェティシズムの規定を行っている(39-40頁)。ただこの項以降は、フェティシズムについての言及は全く行われていない。

- 58) 安岡章太郎は「陰気な愉しみ」という短編小説のなかで、登場人物の口を借りてではあるが、「それがたとい正当な報酬である場合にしろ、金を手渡される瞬間には、人は何かある屈辱を感じはしないだろうか」という感慨を述べている(安岡[1966] 32頁)。「ある屈辱」は、直後の一文で「変な気まずさ」ともいいかえられている。この感慨は、経済学の観点から見ても興味深い洞察を含んでいる。

ただ、この「変な気まずさ」は、金を手渡される側から手渡す側に回れば消えるという保証はない。受取人であれ支払人であれ、ともかく貨幣にたいして当事者の立場に置かれること自体が、否応なしに「演技のふり」を強要するのである。勿体ぶって支払うのも、勿体ぶらずに支払うのも、他人の目を意識した「演技のふり」であることに変わりなく、どちらも自分の本心に嘘をついているように感じられてくる。「深層演技」を長く続けてきた接客労働者が、いつしか良心の呵責を覚え始めるのも、これと似た事例であろう。

- 59) 宇野[1971] 78-79頁も参照せよ。
- 60) しかもこの状況は、資本が賃金制度の操作を労働統制の根幹に据えることで、いっそう逃れ難いものになる。
- 61) 黒川[1983]は、いかなる肉体労働にも大脳の運動野・知覚野・連合野などの活動が伴うから、「肉体労働と精神労働との分離」という表現は、医学的・労働科学的見地からすれば「不正確であるばかりでなく、誤っている」と論断している(102頁)。むしろこの論断は、「頭の労働と手の労働との分離」という表現にも当てはまるであろう。
- ただ、肉体労働者の「頭の労働」の内容は、医学的・労働科学的見地からは到底語り尽くせないというのが、本稿の見解である。

なお黒川とは反対に、事務労働の単純作業的な性格を理由にして「肉体労働と精神労働(頭脳労働)との分離」という表現に異議を唱えたものとして、中岡[1969] 105-109頁、中岡[1971] 151頁を参照

せよ。また芝田[1962]は、物質的・生産的労働と精神的労働とは不可分離であるとした上で、この分離不能性をもたない「精神的生産」を精神的労働から明確に区別すべきであるという主張を行っている(73頁)。

- 62) 渡辺[1987]は、労働過程には人間労働・労働対象・労働手段という諸契機の合目的性格が関わる「目的実現」の側面の他にも、各契機の特殊的・有用的内容が関わる「内容実現」の側面や、諸契機を結合させる比率と方法とが関わる「技術」の側面があるとした上で、「労働過程の内容を労働過程の目的と同一視することは誤りである」という見解を述べている(237-238頁)。

また小幡[1996]は、現実の環境は人間の認識能力をはるかに超えた複雑さを持ち、抽象的なイメージである労働の目的がいつでもそのままのかたちで実現されるとは限らないという理由から、構想労働はたんなる目的の設定の他にも、環境からのフィードバックに基づいた「目的の修正」やその「逐次的補正」にまで関わらざるをえないという見方を示している(117頁)。

- 63) 浅見[1986]は本稿と同様、労働が「理性の狡智」による労働の客体的条件の意志的支配という側面をもつことに着目した上で、この側面の裏側には、労働者による労働の客体的条件の所有(労働と所有との統一)という側面が伏在するという見解を示している(86-89頁, 252頁)。
- 64) 拙稿[2013・14](2)28頁を参照せよ。
- 65) 崎山[2006]は、感情労働には「対人関係そのものの、あるいはそれを良好なものに保てる自己の感情管理のスキルを示すことによる卓越化への欲望」(8頁)を喚起する側面があり、これらの欲望が労働者とクライアントとの双方から動員され、企業組織体の利潤追求や感情統制のために利用されるところに、感情労働を取り巻く現代的環境の特性を読み取っている。
- 66) Petit[1980]は、協業(協同化された労働)では、各労働者の努力をある共通目的へと意識的・意志的に方向づける「実践的相互主観性」が芽生えるものとした上で、この「実践的相互主観性」が各労働者の個別的な主観性から分離されてしまうところに、資本主義の下で行われる協業の特性を読み取っている(〔訳〕41-49頁)。
- 67) こうした市場原理の浸透をめぐって生じるイデオ

ロギーの問題については、小幡 [2009] 301頁を参照せよ。Marglin [1971] も、「発明は、一般に知識と同様に＜公共財＞である。パンの消費が小麦のストックを減らすのとは異なり、ある人のアイデアを使うことは、知識のストックを減らしはしない」と述べて、特許制度が発明家にインセンティブを与える唯一の方法であるという通説に疑問を呈している（(訳) 124-125頁）。

## 参考文献

- Arrow, K. [1974] *Limits of Organization*, W. W. Norton & Company, NY.  
村上泰亮訳『組織の限界』岩波書店, 1976年。
- Benton, T. [1993] 'Marx on Humans and Animals : Humanism or Naturalism', *Natural Relations, Ecology, Animal Rights and Social Justice*, Verso, London.  
山口拓美訳「マルクスの人間論と動物論——人間主義か自然主義か——」神奈川大学『商経論叢』第51巻第1号。
- Braverman, H. [1974] *Labor and Monopoly Capital : The Degradation of work in the Twentieth Century*, Monthly Review Press, NY.  
富沢賢治訳『労働と独占資本——20世紀における労働の衰退——』岩波書店, 1978年。
- Cutler, T. [1978] 'The Romance of 'Labor'', *Economy and Society*, vol. 7, no. 1.
- Edwards, R. [1979] *Contested Terrain : The Transformation of the Workplace in the Twentieth Century*, Basic Books, Inc., Publishers, NY.
- Harvey, D. [2010] *A Companion to Marx's Capital*, Verso, New York.  
森田成也・中村好孝訳『＜資本論＞入門』作品社, 2011年。
- Harvey, D. [2011] *The Enigma of Capital and the Crises of Capitalism*, Profile Books.  
森田成也・大屋定晴・中村好孝・新井田智幸訳『資本の＜謎＞』作品社, 2012年。
- Hegel, F. [1830] *Enzyklopädie der philosophischen Wissenschaften im Grundrisse*.  
松村一人訳『小論理学』(下), 岩波文庫, 1952年。
- Hegel, F. [1821] *Grundlinien der Philosophie des Rechts*.  
藤野渉・赤澤正敏訳『法の哲学』中央公論社, 1967年。
- Hochschild, A. [1983] *The Managed Heart : Commercialization of Human Feeling*, University of California Press, Ltd.  
石川准・室伏亜希訳『管理される心——感情が商品になるとき——』世界思想社, 2000年。
- Knight, D. & Willmott, H. [1989] 'Power and Subjectivity at Work : From Degradation to Subjugation in Social Relationship', *Sociology*, vol. 23, no. 4.
- Leidner, R. [1993] *Fast Food, Fast Talk : Service Work and the Routinization of Everyday Life*, University of California Press.
- Leontiev, A. [1965] Биологическое и социальное в психике человека, второе издание, Изд. «Мьюль», Москва.  
「人間の心理における生物的なものと社会的なもの」(松野豊・木村正一訳『認識の心理学』世界書院, 1978年)。
- Nelson, D. [1975] *Managers and Workers : Origins of the New Factory System in the United States 1880-1920*, The University of Wisconsin Press, Madison.  
小林康助・塩見治人監訳『20世紀新工場制度の成立——現代労務管理確立史論——』広文社, 1978年。
- Marglin, S. [1971] 'What Do Bosses Do?', *Harvard Institute of Economic Research Discussion Paper*, no. 222.  
八木甫・鈴木良尚訳「ボスたちは何をしているか——資本主義的生産におけるヒエラルキーの起源と機能——」青木昌彦編著『ラディカル・エコノミックス』中央公論社, 1973年。
- Marx, K. [1849] *Lohnarbeit und Kapital*, .  
長谷部文雄訳『賃労働と資本』岩波書店, 1981年。
- Marx, K. [1862-64] *Das Kapital*, Bd, I, II, III, in *Marx-Engels Werke*, Dietz Verlag, Berlin.  
岡崎次郎訳『資本論』国民文庫(1)-(9), 1972年。  
引用は (K., I, S.51, (1)75頁) のように行う。
- Petit, J. [1980] *Du travail vivant au système des actions, Une discussion de Marx*, Éditions du Seuil, Paris.  
今村仁司・松島哲久訳『労働の現象学』法政大学出版局, 1988年。
- Smith, A. [1776] *An Inquiry into the Nature and Causes of the Wealth of Nations* (edited by Edwin Cannan, 6th edition, 1950).



- 大内兵衛・松川七郎訳『諸国民の富』岩波書店〔1〕-〔5〕, 1959-66年.
- Thompson, P. [1983] *The Nature of Work : An Introduction to Debates on the Labor Process*, Macmillan Education Ltd., Houndmills.
- 成瀬龍夫・青木圭介ほか訳『労働と管理——現代労働過程論争——』啓文社, 1990年.
- 浅見克彦 [1986]『所有と物象化』世界書院.
- 阿部浩之 [2010]「感情労働論——理論とその可能性——」経済理論学会編『季刊・経済理論』第47巻第2号.
- 阿部浩之 [2015]「対人サービス労働における労働組織——『資本論』第1部第12章「分業とマニュアルクチュア」の検討を中心に——」政治経済研究所編『政経研究』第105号.
- 阿部浩之 [2017]『テキスト・経済学概説』関東図書.
- 尼寺義弘 [1999]「ヘーゲルの「理性の狡智」と目的活動」阪南大学『阪南論集(社会科学編)』第34巻第4号.
- 伊藤誠 [1981]『価値と資本の理論』岩波書店.
- 伊藤誠 [1989]『資本主義経済の理論』岩波書店.
- 稲村毅 [1985]『経営管理論史の根本問題』ミネルヴァ書房.
- 岩淵誠一 [1980]「日本最初の機械工労働者群の創出過程」(上), 職業訓練大学校『技能と経済』.
- 宇野弘蔵 [1950・52]『経済原論』岩波書店(『宇野弘蔵著作集』第1巻, 岩波書店, 1973年).
- 宇野弘蔵 [1964]『経済原論』岩波全書(『宇野弘蔵著作集』第2巻, 岩波書店, 1973年).
- 宇野弘蔵編 [1967]『現代経済学演習講座・新訂経済原論』青林書院新社(『宇野弘蔵著作集』第2巻, 岩波書店, 1973年).
- 宇野弘蔵編 [1967・68]『資本論研究』I-V, 筑摩書房.
- 宇野弘蔵 [1971]『経済政策論・改訂版』弘文堂(『宇野弘蔵著作集』第7巻, 岩波書店, 1974年).
- 大内力 [1981・82]『経済原論』上・下, 東京大学出版会(『大内力経済学大系』第2・3巻, 東京大学出版会).
- 大島俊一 [1980]「工場制度の形成と管理職能——管理組織の確立過程を中心として——」『鈴鹿短期大学紀要』創刊号.
- 大野威 [1994]「労働過程論争における主体概念の検討」東京大学文学部『ソシオロギス』第18号.
- 小倉利丸 [1985]『支配の「経済学」』れんが書房新社.
- 小倉利丸 [1998]『搾取される身体——労働神話からの離脱——』青弓社.
- 尾高煌之助 [1988]「内部請負と内部労働市場——労働過程変革の歴史理論——」一橋大学『経済研究』第39巻第1号.
- 小幡道昭 [1988]『価値論の射程——無規律性・階級性・歴史性——』東京大学出版会.
- 小幡道昭 [1993]「ロックの労働概念」伊藤誠・小幡道昭編『市場経済の学史的検討』社会評論社.
- 小幡道昭 [1995]「生産と労働」東京大学『経済学論集』第61巻第3号.
- 小幡道昭 [1996]「情報通信技術の発展と労働の変容」伊藤誠・岡本義行編著『情報革命と市場経済システム——企業と産業の構造転換——』富士通経営研修所.
- 小幡道昭 [1999]「貨幣・信用論研究の課題」小幡道昭編著『貨幣・信用論の新展開』社会評論社.
- 小幡道昭 [2009]『経済原論——基礎と演習——』東京大学出版会.
- 小幡道昭 [2014]『労働市場と景気循環——恐慌論批判——』東京大学出版会.
- 角田修一 [2002]「ヘーゲル論理学・概念論と「資本」の方法」立命館大学『立命館経済学』第51巻第2号.
- 鎌倉孝夫 [1996]『資本主義の経済理論——法則と発展の原理論——』有斐閣.
- 川口啓子 [2012]「事務労働概念の考察——初期の研究から——」『立命館産業社会論集』第48巻第1号.
- 川村哲也 [2004]「資本主義的労働過程と権威」神奈川大学『経済貿易研究: 研究年報』第30号.
- 木前利秋 [1983]「労働過程論の基本問題」伊藤誠・櫻井毅・山口重克編『価値論の新展開』社会評論社.
- 黒川俊雄 [1983]「現代のME革命とマルクスの労働過程論」慶応義塾経済学会『三田学会雑誌』第76巻第3号.
- 齋藤幸平 [2017]「『資本論』のエコロジーから考えるマルクスとエンゲルスの知的関係」経済理論学会編『季刊・経済理論』第53巻第4号.
- 坂本清 [2017]『熟練・分業と生産システムの進化』文眞堂.
- 崎山治男 [2006]「欲望喚起装置としての感情労働——感情労働の「再発見」に向けて——」『大原社会問題研究所雑誌』第566号.

- 篠原三郎 [1978] 『現代管理論批判』新評論.
- 芝田進午 [1962] 『増補改訂・現代の精神的労働』三一書房.
- 清水真志 [2003] 「企業統治と市場機構」『香川大学経済論叢』第76巻第2号.
- 清水真志 [2007] 「商品世界と使用価値——欲望論の視座から——」(1)・(2), 『専修大学社会科学研究所月報』第527号・第528号.
- 清水真志 [2008a] 「価値概念の二重性——同質性と交換性——」(1)・(2), 『専修大学社会科学研究所月報』第541号・第542号.
- 清水真志 [2008b] 「同質性としての価値概念」経済理論学会編『季刊・経済理論』第45巻第3号.
- 清水真志 [2009・10] 『『商品経済の物神崇拜的性格』をめぐって』(1)~(3), 『専修経済学論集』第44巻第1号~第3号.
- 清水真志 [2013・14] 「もう一つの商業資本論——『商人資本に関する歴史的事実』を手掛かりとして——」(1)~(3), 『専修経済学論集』第48巻第1号~第3号.
- 清水真志 [2014・15] 「商業資本と商品価値——物神性論の視座から——」(1)・(2), 『専修経済学論集』第49巻第2号・第3号.
- 清水真志 [2017・18] 「労働力と商人」(1)・(2), 『専修経済学論集』第52巻第2号・第3号.
- 菅原陽心 [1996] 「資本による労働編成の変化と資本主義経済システム」河村哲二編著『制度と組織の経済学』日本評論社.
- 菅原陽心 [1997] 『商業資本と市場重層化』御茶の水書房.
- 鈴木和雄 [1998] 「感情労働と労務管理」『弘前大学経済研究』第21号.
- 鈴木和雄 [2001] 『労働過程論の展開』学文社.
- 鈴木和雄 [2012] 『接客サービスの労働過程論』御茶の水書房.
- 鈴木鴻一郎編 [1960・62] 『経済学原理論』上・下, 東京大学出版会.
- 須藤修 [1984a] 「株式会社と資本の自律化」伊藤誠・櫻井毅・山口重克編『利子論の新展開』社会評論社.
- 須藤修 [1984b] 「資本のオートノミーと権力の正当性——法人企業の組織と行動——」『経済評論』第33巻第9号, 日本評論社.
- 角谷登志雄 [1966] 「資本家の機能と商業労働」愛知大学『法経論集・経済篇』第50号.
- 角谷登志雄 [1968] 『経営経済学の基礎——労務管理批判——』ミネルヴァ書房.
- 角谷登志雄 [1979] 『科学としての経営学——変革期におけるその課題と方法——』青木書店.
- 高取憲一郎 [1978] 「活動の概念と記憶の問題——随意的記憶と不随意的記憶のパラドックス——」鳥取大学教育学部『教育科学』第20巻第2号.
- 高橋正立 [1988] 『生活世界の再生産——経済本質論序説——』ミネルヴァ書房.
- 高柳良治 [2000] 『ヘーゲル社会理論の射程』御茶の水書房.
- 中岡哲郎 [1969] 「事務労働の分析(組織と人間—7—)」現代の理論社『現代の理論』第6号.
- 中岡哲郎 [1971] 『工場の哲学——組織と人間——』平凡社.
- 日高普 [1983] 『経済原論』有斐閣.
- 牧野広義 [2016] 「ヘーゲルとマルクス——社会哲学と論理学——」阪南大学『阪南論集(社会科学編)』第51巻第3号.
- 馬淵浩二 [2012] 『世界はなぜマルクス化するのか——資本主義と生命——』ナカニシヤ出版.
- 森下二次也 [1976] 『現代商業経済論——序説=商業資本の基礎理論——(改訂版)』有斐閣.
- 安岡章太郎 [1966] 『質屋の女房』新潮文庫.
- 山口重克 [1985] 『経済原論講義』東京大学出版会.
- 山口重克 [1987] 『価値論の射程』東京大学出版会.
- 山本泰三 [2011] 「非物質的労働の概念をめぐるいくつかの問題」『四天王寺大学紀要』第52号.
- 吉田文和 [1984] 『マルクス機械論の形成』北海道大学図書刊行会.
- 渡辺雅男 [1987] 「労働過程論」『一橋大学研究年報(社会学研究)』第25巻.
- 和田豊 [1994] 「マルクス派経済学の貨幣理論——労働過程論の視角による原理的解明——」『岡山大学経済学会雑誌』第25巻第3号.